

第3部会

らず芸術への感覚も衰弱し、啓蒙の時代では哲学への信仰が覇権を握り、ポエジーの肅清が始まる。その本性からしてポエジーは自己と他者を結びつける働きを有し、さらに「世界家族」、あるいは「万有の美しき経綸」である美しき社会の形成に寄与する。哲学が体系と国家形成という力により、個人と人類・万有の調和をはかるのに対し、ポエジーは生命に即してそれを行う。「ポエジーを通して、最も高次の共感と協働・共同活動性 (Coactivity) が生じ、有限なるものと無限なるものの最も親密な共同体が成立する」。ポエジーとは社会との紐帯を越えて、万有との紐帯をも示唆し、その紐帯は「生命」に基づくのだ。

ノヴァーリスによれば、ポエジー哲学の両極の関係により文化は三つの段階を辿るといふ。「論証的な」思想家(スコラ学者)と詩人がそれぞれ孤立して活動を行う第一段階。第二段階では哲学とポエジーが上辺だけ合一される。この時代の代表たる折衷主義者はリアルな世界に閉塞されている。最終段階を体験するのは、思想家と詩人が真の意味で統合された芸術家である。彼らは二つの異なる哲学的活動を移行する能力を持ち、「自己を漂わせて、その状態で直観する」。この段階は「超越論的ポエジー」に対応する。

シュライアマハは、『宗教論』で宗教の中核部分たる宇宙との繋がりを直観する感性を涵養する役割を芸術に期待する。他方シュレーゲル弟は哲学とポエジーの統合を果たすのは芸術家と予言する。芸術家とは「より高次の働きをする魂の感官」である。更に「自分自身の宗教、すなわち無限なるものについて独自の見解を有しているものだけが、芸術家たりうる」。芸

術家とは一種の聖職者(祭司)の役割を担うものではないのか。聖職者たる芸術家の像は、ノヴァーリスの『サイスの弟子たち』、『青い花』にも顕現している。

ファイヒテとシェリングにおける

ヨハネ解釈について

諸岡道比古

本論は、ファイヒテとシェリングが『ヨハネによる福音書』第一章をめぐっていかなる議論を展開しているか、を探究するものである。両者は共に神学的立場からではなく、自らの哲学的立場からヨハネ福音書の解釈を試みている。

ファイヒテはヨハネの教説をあらゆる時代に妥当する絶対的真理とある時代に対してのみ真理であるものとに区別する。前者は一節から三節までであり、「イエスの全教説の要旨ならびに普遍的立脚点」を示す。ファイヒテによれば、神は「永遠の昔からあり、永遠に変化することはない」ものであって、神による万物の創造など考えられない。内的で自らのうちに隠れた存在である神は、その存在を自らの現存在により開示される。神の現存在は知であり、知において世界および全事物が現実的になる。換言すれば、「世界および全事物はただ概念において、つまりヨハネの言う言葉において、……意識されたものとして現存在する」。この関係こそ「言葉が最初にあつた。……万物は

言葉によつて成つた」に他ならない。この絶対的真理に対し、四節以下で相対的真理が説かれるが、それは言葉が某年某時にイエスにおいて肉となつた、ということであり、イエス以降、神と合一することを生き生きと洞察する者においては、言葉がイエス・キリストの場合と同じように受肉する、というものである。これは浄福への道としてフィヒテによつて示された宗教の立場に他ならず、暗闇の中を生きる「死んでいる人間」が現世において永遠の生命に与れるということである。

この分析に対し、シェリングの分析は言葉（ロゴス）解釈において全く異なる。シェリングは積極的哲学の出発点である神の最も純粋な現実態から論を起し、神が神の中に神の意志とは無関係に生じた「神とは異なる存在の可能性」をどのようにして現実化するか、つまり世界創造を行うか、という積極的哲学の立脚点からヨハネ福音書を解釈をする。そしてヨハネ福音書冒頭部分に同語反復ではなく、進展するものを見るシェリングは、ロゴスを時機ごとに規定し、デミウルゴスの作用をするものとする。ここにフィヒテとの大きな違いが出る。またロゴスが生命を持ち、光であつたことをめぐつても、両者の解釈に違いが生じる。フィヒテは、光の意味についての認識ができない暗闇を、精神的に低い段階にある人間、死んでいる者とするのに対し、シェリングは暗闇を異教と捉える。しかも異教自身が把握しえなかつた光の意味を「キリストの先在 Präexistenz」と解釈し、その光が纏っていた神の姿を捨て、光が人間の姿で現象することを受肉と考える。つまり、光として先在するキリストが受肉することにより、キリストがキリストとし

て受け入れられることになる。ユダヤ教をも含めあらゆる異教を前提にしてキリスト教を考えるシェリングの宗教観が、イエス・キリストに関してもフィヒテの解釈との違いを生み出す。このようなロゴスを受け入れた者は「神の子の資格」を与えられ、この世が終わるときに、神の子となることが出来る。フィヒテの場合、人はこの世において浄福に、すなわち、自らを無にすることにより神の意志が私たちの中に生じ、浄福に与ることが出来るが、シェリングの場合はこの世が終わるとき初めて救いに与れると考え、両者は救いの時期においても大きく異なる。

このように、『ヨハネによる福音書』の同じ部分を解釈するにしても、フィヒテとシェリング両者の哲学は、解釈に極めて大きな違いを生み出し、救済の時期に関しても現世と来世のように対照的なものになっている。

キルケゴール思想における

罪の不可避性について

行 武 宏 明

キルケゴール思想において罪概念は、信仰概念の対概念として、重要な意義をもつ概念である。この罪概念を、キルケゴール思想におけるキリスト教独自の特徴とされる「超越性」を考慮に入れた上で規定すると、「人間の自力では対処、対応することが不可能な致命的過失」となる。